

当院における初診患者の実態調査

○杉本あゆみ、藤村理衣<sup>1)</sup>、住吉彩子<sup>2)</sup>、  
進士久明<sup>3)</sup>、石田万喜子<sup>3)</sup>

(杉本歯科医院、ふじむら歯科りえ小児歯科  
医院<sup>1)</sup>、スミヨシ歯科口腔外科こども歯科<sup>2)</sup>、  
いしだまきこ小児歯科<sup>3)</sup>)

#### 【目的】

地域保健において、小児歯科の専門性は重要視されている。しかし、行政が行う保険事業での歯科における予防策は、小児歯科医の意見が十分反映されているは言えない場合もある。今回、当院を受診した患者の実態調査を行うことで、地域に向けたう蝕予防の対策を提言できるよう、2010年から2013年の3年間について調査した。

#### 【対象と方法】

2010年6月から2013年5月までに、当院を受診した男女3,322名を対象とし、初診時の主訴、地域別、初回治療の傾向などを調査した。

#### 【結果】

主訴の内訳では、0～2歳では、「健診希望」と「フッ素塗布希望」が多く、3歳以降になると、「むし歯がある」「健診希望」が多い傾向を示した。6～8歳では、「歯並びが気になる」を主訴に来院する患者は、6～7歳での受診者が多く、中切歯萌出時に歯軸の方向異常や、叢生傾向を気にして来院する傾向が認められた。その治療法として、上唇小帯切除の処置数も増加傾向を示した。初診患者数では、学校健診が行われた後で、且つ長期休暇の月である7月が多かった。

#### 【考察】

当院は福岡県南部に位置し、周辺に小児歯科医院が少ない環境にある。約10年前から久留米市で行われている1歳児を対象にした、歯の健康教室の実績から、低年齢児の受診率が高く、保護者のう蝕予防に対する意識は非常に高まっている。小児の口腔内の実態は、地域の保健事業に密接に関係していると考えられる。今後、小児に対してだけでなく、養育者である保護者が、自身の口腔環境を整える努力を促すことが、家族単位での予防策につながると考え、行政に提言したい。

福岡歯科大学医科歯科総合病院小児歯科における歯牙外傷の臨床統計的観察

○逢坂洋輔、馬場篤子、藤村 和、林 容子、酒井亜希子、尾崎正雄

(福岡歯大・成育小児歯)

#### 【目的】

小児歯科では予期せぬ外傷により突然来院する患児は少なくない。小児期における乳歯、幼若永久歯の外傷では、その受傷年齢や外傷の程度により、成熟した永久歯の外傷とは異なった問題がある。今回、演者らは歯の外傷を主訴に来院した患児の臨床的統計を行い、小児における口腔外傷の実態調査を行ったので、若干の文献的考察を交えて報告する。

#### 【対象と方法】

平成15年6月より平成24年12月までの9年6か月間に、歯の外傷を主訴として本学小児歯科外来を受診した1142名、1581歯(乳歯933歯、永久歯648歯)を対象とした。なお、調査は日本小児歯科学会により小児の歯の外傷の実態調査を目的として作成された調査表を基準に行った<sup>1)</sup>。

#### 【結果】

- 1) 受傷年齢は4歳がピークで3歳～5歳児にかけては全体の30%と一番多かった。
- 2) 性差は男児：女児は1.7：1であった。
- 3) 歯種は乳歯が永久歯より多く約60%を占めていた。
- 4) 受傷部位は乳歯、永久歯ともに上顎切歯部が多く、特に上顎乳中切歯、中切歯が多かった。

#### 【考察】

従来、受傷年齢に関しては、1歳～3歳児が多いとの報告<sup>1)</sup>がある。しかし、今回、臨床統計的観察を行った結果、3歳～5歳児が一番多く受傷年齢の上昇が見られた。近年、小児の運動機能低下が報告<sup>2)</sup>されており、このために転倒に伴う危機回避能力も低下していると考えられる。すなわち、身体的バランスがうまく保たれず、転倒しても手で支えきれないため、顎、顔面を受傷しやすいのではないかと考えられた。

#### 【文献】

- 1) 日本小児歯科学会：小児の歯の外傷の実態調査、小児歯誌、34：1-20, 1996.
- 2) 幼児の運動能力における時代推移と発達促進のための実践的介入：平成23年研究成果報告書